

鉄道事故ゼロへ、障害者協がアピール文採択

全日本視覚障害者協議会（田中章治会長）が主催する「鉄道死傷事故ゼロの日中央行動」が2月1日、都内で開かれた。約30人が、視覚障害のある人の鉄道事故がゼロになることを目指して、アピール文を採択した。

中央行動は1973年の同日に全盲の上野孝司さんがJR山手線高田馬場駅のホームから転落し、死亡したことをきっかけに行っているもの。同協議会によると、1994年12月からの17年間で、駅ホームから転落・接触し、死亡した視覚障害者は21人。昨年だけでも3人が亡くなっているという。

参加者らはJR高田馬場駅のホームで上野さんの死を悼み、献花。「安全な歩行・移動は社会参加の前提だ」として、可動式ホーム柵の設置推進と、未

整備ホームの駅員配置を求めるアピール文を採択した。

献花に先立ち、参加者らは東京メトロ高田馬場駅のホームを点検。点字ブロック上に柱があったり、階段の存在を知らせる誘導音の音量が小さかったりするなどの指摘が挙がった。また、電車の先頭部分から固定柵までの距離が3メートル以上あり、参加者同士で注意を呼び掛ける場面もあった。

職場の最寄り駅が高田馬場駅という神作悦穂^{かみさく}さんは「視覚障害がある人への配慮が足りないのは、当事者の声を聞かずに整備しているからではないか」と指摘。「高齢者や子どもなど可動柵になって困る人は誰もいない」などと話した。

（福祉新聞・2562号 2012年2月13日）